

—〈書 評〉—

尾崎秀樹著

『夢いまだ成らず——評伝山中峯太郎』

(中央公論社刊)

(「季刊鵲其山」編集部) 山下恒夫

山中峯太郎の少年軍事小説が、往昔の“愛国少年”に与えた衝撃力の強烈さは、十五年戦争下の時代背景もあずかってか、なにやら異様ともいふべき実在感に満ちたものであったらしい。峯太郎の傑作『亜細亜の曙』が『少年倶楽部』に連載されるのは、1931年1月号からで、翌年夏に完結をみる。この間に、十五年戦争の開始を告げた柳条溝事件（満州事変）が勃発したことが、虚構の冒険小説と目の現実とをはしなくも暗合させ、実在感の迫真力をいっそう募らせてしまったのであろう。そして、いうまでもなく、実在感の根底に巣くっていたのは、かの摩訶不思議なる“アジア解放の理念”だったわけである。

ところで、『亜細亜の曙』の主人公は、ご存じ帝国陸軍の秘密情報部員、スーパースターの本郷義昭だが、あたかもそれは、イアン・フレミングが創成した007のごとき存在であったかのようだ。というのも、太平洋戦争末期、中学一年だったというある峯太郎愛読者が、いやはやなる懐旧の言辭とともに、かく語ってくれたからである。あの日本危うしの際、まさか神風が吹くとは思わなかったが、何処ともなく本郷義昭が出現。憎っくき米国機動艦隊をいっきに殲滅し、劣勢挽回をかならずや果すものと、半ば信じていたのですと。

本書の著者も、少年期を過した植民地下台湾で、独自の峯太郎体験をもつ。当時「皇国少年の一人であった」という著者は、『亜細亜の曙』を耽読、「本郷義昭は虚構の人物だが、もしかすると実際に生きているかもしれない。あるいは本郷義昭は、作者山中峯太郎と等身大の人物ではないだろうか」と、さまざまに思いめぐらしたと記している。さ

すれば、著者もまた、例の異様な実在感に魅せられ、幼い胸底をたぎらせたことがあったのだ。

1961年春、著者は始めて山中峯太郎に会った。峯太郎七十六歳、死の五年前のことである。すでに著者は、少年軍事もの作家山中峯太郎は、第二の作家と呼ぶにふさわしく、それ以前に、筆名山中未成を名乗った、いわば第一の作家時代があったことを知っていた。しかも、その山中未成だった時分に、峯太郎は中国革命へ身を投じた過去をもっていたのである。著者の熱心な慫慂によって、翌年峯太郎は、自己の中国革命への参画のさまを克明に綴った、回想記『実録アジアの曙』を著わした。

だが、その回想記は秘蔵の「暗号手記」をもとにした、詳細を極めた内容であったにもかかわらず、奇妙に現実感の乏しい作品に終わっている。それもそのはず、峯太郎の回想記は、自己の暗部については沈黙を守り、したがって、単なる冒険実話の域を脱しえなかったのだった。そうした峯太郎をめぐる幾つかの事の経緯が、けっきょく著者をして、本書の執筆にいたらしめた動機だったのかもしれない。

本書では、山中未成時代までの峯太郎の半生記が、豊富な資料を縦横無尽に駆使して、綿密に再構成されている。峯太郎秘蔵の「暗号手記」も、研究者の努力により、ものの見事に解読されたのだそう。そこで、本書の内容紹介もかね、以下に「峯太郎半生記」の荒筋を、ごく大ざっぱになぞってみることにする。

山中峯太郎は明治18年、呉服商の次男として大阪に出生。二歳の時、陸軍軍医山中家の養子となった。以後、大阪幼年学校、陸軍中央幼年学校、陸士、陸大という、エリート職業軍人の道を進んだ。陸士時代に、小説『真澄大尉』を吾妻隼人の名で執筆し、『大阪毎日新聞』に連載したのが峯太郎の処女作である。同じ頃、士官学校在学中の中国人留学生と親交をもち、中でも江西省出身の

李烈鈞とは死友の盟約を結ぶ。李烈鈞のすすめで、中国革命同盟会にも加入する。

大正2年初夏、李烈鈞からの密電に接し、陸大の退学処分もものかわ、中国へ渡航。袁世凱打倒の第二革命に、中国名龐繼竜の名で挺身。江西省蜂起失敗後は、上海にあって、大陸浪人新田徳兵衛と手を携え、革命派援助に奔走した。この間、東京朝日新聞社の通信員として、山中未成の筆名を用い、現地からの報道を送り続ける。同年秋、中国人亡命者林虎の身代りとして帰国。その後、孫文との面識をえた。翌年、陸軍を依願免官となり、東京朝日新聞社に入社。そして、記者生活のかたわら、山中未成の名で各雑誌に健筆をふるい、一躍流行作家ともなった。

ところが、順風満帆の峯太郎は、急転直下、転落の憂き目を見る。大正6年6月、淡路丸偽電事件に連座して逮捕、一年半の入獄生活を送った。第一次世界大戦下、ドイツが発動した無制限潜水艦作戦に便乗、客船沈没のニセ電報を入れて、株貨を混乱させ、巨額の金銭を詐取せんとした事件であった。その真相は不明な部分が多く、著者の真相解明もいま一步の観がある。ともあれ、この偽電事件により、峯太郎は山中未成時代のいっさいを、自身の手で抹殺した結果となった。

さて、山中未成時代の峯太郎の多面的な活動、とりわけ、中国革命への捨身の姿勢は、いわずもがな、先に記した本郷義昭像の異様な実在感と結びつく。はたして山中峯太郎は、本郷義昭と同様に、帝国陸軍の秘密情報部員であったのか否か。むろん本書の著者も、この疑惑への追及を随所で試みている。しかし、疑惑は依然解かれぬままに終わったようだ。現時点では、これ以上の山中峯太郎伝を望めないと思うほどに、周到な調査記録を用意した本書が、なおもう一つ迫力を欠くのは、このもっともスリリングな謎解きを、ついに果せなかったためなのだろう。

そこで、本書の著者が言及していない一人物を

挙げ、謎解きへの資料提供としてみたい。

大正2年12月9日付『東京朝日新聞』には、同月7日、群馬県館林町覚応寺境内で、辛亥革命時に死去した、元陸軍大尉加藤佐夫の三周忌法要の記事が載る。記念の石碑「東亜之志士加藤佐夫君墓」の字は、林虎の筆。参列した李烈鈞は号泣したとある。

加藤佐夫は山中峯太郎より六歳年上。職業軍人の道を歩み、日露戦争後の明治39年、陸大に入学。この頃から、孫文、黄興らと交わる。また、陸士在学中の中国人留学生の多くが、加藤を師と仰いだ。李烈鈞は中でも、一番加藤を慕ったという。明治41年、中国の革命派擁護問題で外務次官を論難。ために陸大は退学となり、陸軍大尉の職も剥奪された。翌年、李烈鈞の招きで広西講武学堂教官となり、のち雲南体育学社総弁の任についた。辛亥革命にあたり蜂起に参加するが、革命派内部の内ゲバにまきこまれて射殺された。ちなみに、山中峯太郎が上海で提携した大陸浪人新田徳兵衛は、加藤佐夫の忠実な旧部下であった。

すなわち、加藤の履歴は、陸大退学の一件を含め、山中と非常に類似しているという他はない。のみならず、山中の中国革命における同志だった李烈鈞、新田徳兵衛の両名も、加藤の人脈に属していたわけである。というよりも、加藤亡きあとの後継者の位置に、山中自身が居坐ったようにさえ、一面からはうかがえる。にもかかわらず、山中峯太郎は、加藤佐夫に関する限り、まったく何も語っていない。なんとも不可解な話なのだ。

卓越したプロスパイの軌跡を追うと、情報活動と革命運動とが交差する場面があって、その識別に困難を覚えることがある。アラビヤのローレンスやリヒアルト・ゾルゲは、その典型例なのかもしれない。山中峯太郎の軍事密偵説がスリリングだというのも、そうした範疇での興味なのである。

(1983年12月刊。四六判、318頁、1600円)